ダルニー通信

085
2019 WINTER

ダルニー・ドナー連絡会特集

03　遠州（静岡）ダルニー連絡会
04-05 新潟ドナー連絡会
06　佐久平ダルニー連絡会
07　ダルニーほほえみの会

08-09 相続による寄付
10-11 新評議員と新理事の紹介

ドナー連絡会特集によせて

理事長　秋尾　晃正

ダルニー奨学金は1対1で顔の見える教育里親制度で、寄付金は確実に何処の国のどの学校の誰に給付されたか明白な顔が見える国際協力です。ですが、個々の奨学金提供者からすると運営する民際センターの顔や他の奨学金提供者の顔は見えないのが現状です。

今にちまで約37,000人強の方々が皆同じ思いでダルニー奨学金の提供者となりました。これらの方々が日本全国で点として存在しており、その点と点を結び、線として形成し、最終的に面として発展させて、この教育支援運動を盛り上げ、世界の貧困削減と平和構築に貢献できればと初めてこの課題で特集に取り組みました。

設立当初から、県レベルで支部の創設を試み、神奈川、千葉、埼玉の支部ができましたが、当時は事務局体制も確立できておらず、支部の要求に対応できず解散した歴史もありました。その後ドナー連絡会として、勝手連の形式で、民際センターを支援する緩やかな組織の設立に手を挙げる方々を頼りに形成し、今日に至っています。盛んな時もあり、全国大会などを開催した時代もありました。今回紹介するドナー連絡会は今も活発に活動をしている組織です。

これらの連絡会は、ロータリークラブやライオンズ・クラブ等の殆どの組織の様に、伝統的な概念で形成された地域性を優先にした地域型ドナー連絡会です。時代を先取りし、提案したいのは、On-Line時代の組織の在り方です。民際センターはOff-Line からOn-Line時代に適した運営方針の変革に着手しました。視点を変えて、ICTを駆使すれば、地域性を脱却し、Special Interest Group（SIG）のドナー連絡会の形成も可能な時代ともいえるのではないでしょうか。

ペンパル（ペンフレンド）でなく、D-Pal（デジタルフレンド）で、友達になり、国際的に輪を広げる運動を20年ぐらい前に実施しましたが、ネットが今ほど普及しておらず、失敗に終わりました。しかし、時代は到来。未来志向で考えれば、教育支援を通して貧困削減と平和構築の運動を進める理念を同じくする方々により、実務型と趣味型のSIGを形成することが可能な時代となったのです。実務型は自分の持つ知識や技術を活かして、貧困削減に協力する。趣味型も同様で、同じ趣味の方々が、その趣味を活かした活動を行っています。国内活動としても、自然災害に遭遇した仲間を支援することなど、いろいろ考えられるのではないでしょうか。言い換えれば、自宅に居ながら、自分の実務経験や趣味を有効に活かしたボランティア活動を仲間と一緒にやろう！という考え方です。

地域型、SIG型どちらでも関心のある方はinfo@minsai.org に「連絡会」のタイトルでご連絡ください。ダルニー通信やメルマガを通して、他の奨学金提供者に呼びかけることができます。考えを同じくする方々と仲間を形成することは楽しいものです。

遠州（静岡）ダルニー連絡会

遠州（静岡）ダルニー連絡会 世話人　畑　　寛 和

私が遠州ダルニー連絡会を立ち上げたのは、2001年のことです。早いものでもう18年となります。あっという間のことですが、振り返れば、時の流れを感じます。

全国連絡会会議（通称‥ダ連会議）　2008年ころ

子供たちの支援を考えたのは、前年の海外出張がきっかけでした。インドネシアや中国への出張の度に、現地の子供たちの就学状況に唖然としていました。家庭の仕事を手伝うために、学校を辞めなくてはならない子供たちの圧倒的な数に驚きました。

たまたま新聞で見かけた、「顔の見える支援、ダルニー奨学金」という記事から、教育里親に応募しました。以来、29人の子持ちとなっています。遠ダ連の活動は3つの期に分けることができます。

黎明期《2001年1月～ 2004年12月》

遠州ダルニー連絡会として正式に発足し、浜松市で開催されていた国際交流フェスティバルにブースを出展し、積極的に広報を行っていました。またタイの里子達の直接訪問を始めた時期です。静岡県内40名のドナーの皆さんから、現地の子供たちへの手紙とプレゼントを受け取り、イサーン19県で訪問を重ねて来ました。子供達の手紙と写真は、各ドナーにお届けをし、延べ60校ほどを訪問しました。

展開期《2005年1月～ 2009年12月》

静岡市に転居し、他県の連絡会と連携して、「全国連絡会会議」を開催していた時期です。この頃は、「新潟ドナー連絡会」「佐久平ダルニー連絡会」と、連絡会3兄弟と呼ばれていましたが、現在でも交流は続いています。

発展期《2010年1月～ 2019年現在》

全国のバレーボール仲間に声を掛け、「バレーボール千個プロジェクト」を開始しました。2年目で目標を達成し、その後、「バレーボール富士山3,776個プロジェクト」→「バレーボール1万個プロジェクト」と、進化しています。
現在、累計で5,400個のボールを贈ることができ、全国のバレーボーラーに感謝です。
2014年からは教え子の大学生達を伴い、教室を開催しています。
これからも、日本とタイ、ラオス、ベトナムの子供達の橋渡し役を務めたいと考えています。

新潟ドナー連絡会

新潟ドナー連絡会 世話人　赤石　隆夫

国際交流イベント

奨学金ドナーの皆さんは、かつて全国各地に存在した日本各地の「ドナー連絡会」の存在を記憶されているでしょうか?『ああ、そういえば、あった、あった・・・今はどうなったの?』　そんな声が聞こえてきそうです。そうです、かつて、全国各地に30以上のドナー連絡会が存在し、それぞれ独自の民際活動を行っていました。連絡会の発足を発声したドナーの方々の顔ぶれも、活動も、想いも様々で多様性に富んだ当時の日本で初めての「草の根群(軍?)団」でした。強いて云うならば、「民際交流センター」が落滴した小さいながらも何やら予測不能な可能性を秘めた草の根市民の集まりでした。それぞれの連絡会ごとに特徴的な歩幅、手振り、身振りは「ダルニー奨学金」という核を中心に波立ち、小さいながらも各地で渦を巻き始めていました。また、幾つかの渦は合流し、互いを刺激し、より大きな海練(うねり)となったことも懐かしく思い出します。そして、その余波は未だ鎮まってはいないと感じています。

そんな頃に生まれた「新潟ドナー連絡会」でしたが、その活動は、県や市が開催する所謂「国際交流イベント」での広報ブースへの出店でした。そのような機会には、秋尾代表や東京事務局スタッフの援護参加などもあり、会員は大いに鼓舞されました。

タイ東北部への連絡会研修旅行も、会員同士の結束を強めた忘れられない活動となりました。また、全国の賛同する連絡会が集い、「全国ドナー連絡会会議」と銘打った会議が、現在でも活発に活動している佐久平ダルニー連絡会世話人・柳澤氏の発案によって、各地域で毎年リレー開催されていました。「民際交流センター」も「(公財)民際センター」へと変化発展を遂げ、瞬く間に発足20年目を超えた新潟ドナー連絡会です。現在では、その活動形態や会員の顔ぶれこそ多少変化しましたが、当時の気概だけは今も健在です。それでは今年の連絡会の広報活動の一幕を振り返ってみることにします。どうぞ、ご笑読下さい。

タイ東北部への連絡会研修旅行

長い10連休の後半、5月3〜5日の3日間、好天のもと恒例の第10回新潟アースフェスティバルが新潟市内で開催されました。ダルニー奨学金広報の絶好の機会を逃すはずもない新潟ドナー連絡会です。とはいえ、3日間はきついので恒例（高齢）の2日間としました。東京での代々木公園タイフェスティバルの向こうを張り、新たな必勝ツールと、既に恒例となった新潟ドナー連絡会の隠し刀である増井氏の力添えが実を結んだ多くのベトナム留学生のサポートも得、更に今年は、佐久平ダルニー連絡会世話人・柳澤氏と、船橋より駆けつけた古参ドナー・中村氏を加えての戦陣となりました。

全国ドナー連絡会会議

香り高いベトナム珈琲の無料試飲で道行く新潟市民の足を停め、昨年のシニア・イサーン研修にて破格の値引きで入手した販売グッズと、奨学金の広報へと巧みに市民を誘導します。折しも其の日はタイ王国では新国王の就任セレモニーで国中が真黄色とか。新潟世話人も急遽、東京事務局の物置から横流して頂いた販売用のタイ王国エンブレム入の黄色のポロシャツで人目を引きつけます。佐久平ダルニー連絡会世話人・柳沢氏にあっては9月に開催される佐久国際交流フェスティバルの会長でもあり、次なる戦いの参考とするためか、あるいは単に楽しく盛り上がっているだけか、他の NGO ブースの偵察活動に余念がありません。落ち着き払った古参ドナー中村氏にあっては、信玄公に習ってか“不動如山（動かざること山の如し）”で、ブース陣営内に鎮座し、新潟ドナー連絡会の旧戦友の重鎮、斉藤氏と増井氏、そして我らの（いや、留学生たちの）戦いぶりを見守っています。

新潟アースフェスティバル

そんなこんなで、その日の夕刻は美味しいタイ料理に舌鼓を打ちながらの打ち上げ会となりました。得られた奨学金は2名分を優に超え、懐かしい顔が揃ったこともあり、夜遅くまで今昔ダルニー奨学金武勇伝に花が咲いたのでした。

佐久平ダルニー連絡会

佐久平ダルニー連絡会　代表　柳澤　光一

佐久平ダルニー連絡会の皆さんと長野県 PR キャラクター「アルクマちゃん」

佐久平ダルニー連絡会は2001年1月に設立しました。会員は12名です。長野県の東信地区(佐久市・上田市・小諸市・軽井沢町)を中心に「ダルニー奨学金」の紹介とドナー募集活動を行っています。また、佐久市在住外国人への生活に関する支援活動も併せて外国人との交流など実施しています。

主な活動としては、会員各自がドナーとなり奨学金の提供と、毎年佐久市で行われる「国際交流フェスティバル」にブース参加し、より多くの方に民際センターの活動の紹介とドナーの募集の他、小物販売など行い奨学金の確保を行っております。

この他、中学校・高校や諸団体でのダルニー奨学金紹介の講演活動の他、書き損じはがきや切手などの収集も行い奨学金に充当しています。

また、不定期ですがタイへの訪問などで奨学生の家庭に訪問し現地の方と交流を図ったり、民際センターの訪問ツアーに参加し東南アジアの子供達の教育事情などの研修を行っています。

メンバーの中には、奨学生との文通により交流が深くなり、中学校から大学卒業まで奨学金の提供を行いました。日本のお父さんとして大学の卒業式に招待され、大学長にダルニー奨学金の紹介をしたこともありました。奨学生の日本への招待や日本の学校訪問など交流を図り新聞記事で紹介されたこともあります。結婚式に父親代理として参加し、会場でのあいさつなど行うなど奨学生とのつながりが深くなったメンバーもおります。

佐久平ダルニー連絡会のモットーは「明るく・楽しく・無理をせず・そして一歩前に」で活動しています。

ジンバブエご夫婦の結婚式イベント。柳澤さんが仲人を務めました。

ダルニーほほえみの会

ダルニーほほえみの会　世話人　渡辺　幸男

「ダルニー奨学金の広報」と「できる範囲での奨学金支援」を活動方針に、社協のボランティアボードへのポスター掲示や、社協主催のイベントで募金活動が中心活動です。募金の目標は「毎年1名支援」で、お陰様で2006年から2017年まで目標達成、合計で22口の支援ができました。
2019年4月、タイのナコーンラーチャシーマ県Pradoksamakkee校のノイ先生から、貧しい生徒の就学支援要請の手紙が届きました。ノイ先生は、幼稚園が併設された、生徒数69名の小さな小学校で、スクールダイレクターをされています。同校に転勤してきたノイ先生は非常に厳しい環境で暮らしている子供達数名と出会い、当会に支援を要請したのです。その子供達を紹介します。

①メーォ (小6) とモォ (小5) 姉妹：　☜写真左

両親は離婚して、現在おばさん夫婦の世話になっています。おばさん夫婦は、お祖父さんと子供3人の計6人です。おばさん夫婦の家計に、この姉妹が大変な重荷となっています。

②パンナポーン(中1)：　写真右☞

ノイ先生の小学校を卒業して、バーンノーングラーク中学校に入学しました。64才の母方の祖母と暮らしています。お祖母さんには二人で暮らすには十分な大きさの家がありますが、自分の田畑はありません。生活は大変です。

③ボイ(小3)：　☜写真左

ボイ君の家族は祖父母と両親と彼の5人家族です。父親はバンコクで働いています。出稼ぎの父親からの送金は毎月3,000バーツです。タイ統計局が発表した1世帯当たりの月平均支出は21,346バーツです(2018年調査)。全国平均より低い東北地方でも16,343バーツです。毎月3,000バーツの仕送りでは大変な事が良く分かります。

民際センターご支援者様のご寄付紹介

相続による寄付

ご支援者の井上文子様がお父様の遺贈寄付でラオスに学校を建てられた実例が、毎日新聞WEB「医療プレミア」2019年3月12日に掲載されました。今回はその記事の抜粋を紹介いたします。

百年人生を生きる

「私の遺産役立てて」遺贈寄付は次世代への愛

星野　哲（ライター／立教大学社会デザイン研究所研究員）

一生を懸けて築き上げた財産は、生きた証しの一つだ。自身の死後、大切な財産の一部を家族や親族以外のNPO法人や公益団体などに寄付して社会に生かす遺産の使い方が注目されている。遺言によって寄付先を生前に指示したり、相続人が故人を思って寄付したりする。「遺贈寄付」と呼ばれる、まさに人生最後の社会貢献だ。恩返しや生きた証しなど「思い」のこもったお金が次世代につながることで、「寄付者よし、受け手よし、社会よし」の「三方よし」を生み出している。

⋮

中略

⋮

タイ国境に近いラオス国内に15年11月、中学校が建設された。それまで集落から10Km以上離れた場所にしか中学がなかった地域で150人ほどが学ぶ。この学校は、埼玉県行田市の社会保険労務士、井上文子さん（66）が、父・田島清作さんからの相続財産1200万円を公益財団法人「民際センター」に遺贈寄付したことで完成した。

父親の思い出などを語る井上さん＝埼玉県内で筆者撮影

校庭には、田島さんの名前と共に「学びで自分が変わる。地域が変わる。国が変わる。教育の場を」とラオス語で刻まれた木の看板が立つ。田島さんの「思い」を、井上さんが文にした。竣工式に参加したときの写真を見ながら、井上さんは「完成して2年後に訪問したら、看板の下が花壇になっていたんです。なんだかうれしくて、とても誇らしくて。たとえ遠くても、この同じ空の下に父の生きた証しがあり、人の役に立っている。『お父さん、やったね』という気分なんです」と声を弾ませる。

井上さんの父親のお店の様子

父の思いを大事に

田島さんは1927年、7人きょうだいの次男として生まれた。家は貧しく、高等小学校を出て働いた。戦後魚の行商から始めて財を成し、井上さんら3人の子どもを育てた。田島さんは特に子どもたちの教育に熱心で、「たとえ泥棒でも、学力や勉強したことは盗めない。しっかり勉強しなさい」と繰り返し語っていたという。

田島さんが06年に亡くなり、きょうだい3人で遺産を相続した。その時、井上さんの夫一博さんから「自分たちで働いて得たお金で暮らすのが本当の自分たちの生活だから、遺産には手をつけたくない」と言われ、遺贈寄付に考えが至ったという。

父の思いを考えれば、寄付するなら教育関係にしたい。井上さんはもともと公益財団法人民際センターを通じて、途上国の子どもたち向け奨学金を寄付していた。信頼できる団体かどうかを確かめようと、民際センターでボランティアをしながら様子をみて、最終的に遺産を託すことを決めたという。

現地での開校式で井上さんが撮影した写真。
父親の遺影を持参した（井上さん提供）

幸せが連鎖する

「遺贈寄付をしたことで、学校に通えるようになった子どもたちとその家族が幸せになり、私自身もとても幸せな気持ちになった」。井上さんは、自身も遺産の半分程度を寄付したいと、遺言を作成することを考えている。「母親のお金が社会の役に立てば、子どもたちにもきっと幸せが連鎖していくと思うから」と井上さんは語る。

寄付は、他者のためになる「利他」の行為だと思われがちだ。だが、利他であると同時に、自分にも喜びや満足をもたらす「自利」でもある。

低くない遺贈への関心

筆者は遺贈寄付の事例などを取材し、著書にまとめた。寄付先も寄付額もさまざまだったが、共通して感じるのは、遺贈寄付には「思い」がこもっているということだ。自分が大切にしてきた生き方や考え方をお金に託して次世代につなげたり、お世話になった団体や社会に恩返ししたりする。故人の思いを実現することで、故人を誇りに思い、残された側が悲嘆をやわらげる。同時に寄付を受けた側も、自分たちの活動が評価されたことで喜びを感じていた。特別な「思い」を託されたことで活動にいっそう力が入るといった好循環を生む。さらに、その活動によって社会課題が解決される。まさに「三方よし」のお金の流れが生じているのだ。

⋮

以下省略

全文は民際センターホームページ（https://www.minsai.org/news/bequest/）にて紹介しています。

新評議員と新理事の紹介

2019年6月の評議員会で新評議員1名と新理事1名の方に就任していただきました。今回はその方々の紹介をします。

新評議員

股野 尚子（筆名 さらだたまこ）

【支援経歴】

民際センターの活動を知ったのは今年になってからでした。早速、奨学金ドナーに登録し、現在はミャンマーの子どもの支援と、マンスリーサポートをさせていただいてます。

【現職】

一般社団法人　日本放送作家協会理事長（2012年より）
市川森一・藤本義一記念　東京作家大学学長（2015年より）
一般社団法人日本脚本アーカイブズ推進コンソーシアム監事（2016年より）

【評議員を引き受けた理由】

ちょうど、今年還暦を迎えました。昭和に生まれて30年経ったら平成に変わり、そしてまた30年経ったら令和になりました。昭和の30年間はスクスク育ててもらい、続く平成の30年間も、多少の起伏はあれど、人並みに幸福な日々を過ごしてきました。さて、きりよく人生も三度目の成人式を迎えたところで、自分が享受したささやかな幸せを、お返ししていく時期になったと思い、何か「行動に表す」ことができないかと思っていたときに、民際センターのダルニー奨学金のことを知りました。ドナーになるだけでなく、評議員にとのお話をいただいたとき、「行動に表す」と決めた自分に、具体的な目標が明らかになると思い、お引き受けした次第です。

【民際センターの評議員として何がしたいか】

私の職業は放送作家です。テレビを始め放送媒体の番組の企画、脚本を主に手がけていますが、ゼロから物事を構築し、ある形にして表現し、テーマを持ったメッセージを伝えることが仕事です。現在、いくつかの団体の役員をしていますが、結局はもの創りのノウハウを役立てるしかありません。民際センターの活動においても、私がこれまで培ったノウハウや感性がお役に立つように「行動に表したい」と思っています。どうぞ、いろいろご指導賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

新 理 事

柳澤光一（佐久平ダルニー連絡会 代表）

【経歴】ダルニー奨学金を紹介する活動を、長野県東信地区(佐久市･小諸市･上田市･軽井沢町等)を中心に行っております。
1992年からタイ工場の立ち上で7年間赴任し、工場運営で教育の大切さも痛感しました。
赴任中にタイ国内をたびたび旅行し、タイ国の都会と地方の貧富の差を体験し、教育が十分でない子供たちは、まともな仕事に就くこともできない悲しい現状を目の当たりにしてきました。
工場団地内の日系企業の集まりの中で「タイ国に貢献することをしよう！」との意見が出て、どのような支援の方法が良いかを検討している時に読売新聞の記事で「ダルニー奨学金」が紹介されており、ダルニー奨学金を提供したのが民際センターとの出会いでした。その後、EDF THAIの事務局の方々への支援も行うようになり、民際10周年のイベントで日本語通訳がボランティア参画したり、帰国後ダルニー奨学金の紹介を行うために2001年「佐久平ダルニー連絡会」を設立し現在に至っております。

【理事を引き受けた理由】日本帰国後当時民際センターのホームページ内にあった「ドナー掲示板」でドナーの方々が「なぜ奨学金を提供しているか･･･」と言うことを熱く語っておりました。掲示板での交流だけでは物足りなくなり「顔を合わせてもっと熱く語り合おう」となり「第一回全国ドナーの集まり」を軽井沢で開催し各ドナーの自慢話がはじまりました。この会は、毎年各地で開催し民際センターの応援団としての機能を果たしてきました。この活動を今後とも続けてドナーの皆さんの交流を図りドナーをさらに増やしたく思っています。

【民際センターの理事として何がしたいか】ドナーの皆さんとの繋がりを深めていき、民際センターのさらなる発展に努めたいと思っています。

【まとめ】民際センターの活動をより多くの方々に知っていただき、一人でも多くの子供達の将来が幸せになる活動になれば幸いです。

●代表理事
秋尾 晃正
公益財団法人 民際センター 理事長

●評議員
阿刀田 高
作家 一般社団法人日本ペンクラブ 元会長
衛藤 真規
株式会社サイタコーディネーション 代表取締役
大島 仁志
キリンビール株式会社 元常務執行役員
小笠原 耕司
弁護士・小笠原六川国際総合法律事務所 代表
加藤 隆久
建築家・加藤隆久都市建築事務所 代表取締役
酒井 順子
作家 エッセイスト
行方 一正
株式会社エイチ・アイ・エス 元取締役相談役
平野 健一郎
東京大学名誉教授 早稲田大学名誉教授
股野 尚子
放送作家 劇作家 エッセイスト
山下 大
情報印刷株式会社 代表取締役社長

●理事
赤石 隆夫
医学博士・新潟大学医学部総合医学教育センター
阿部 紘士
ディグランド株式会社 代表取締役
神村 正樹
株式会社BUA 代表取締役
後藤 満
株式会社ユミコミックス 代表取締役
谷田 脩一郎
NPO マーケティングラボ 編集長
ピーターフックス
立教大学観光学部 特任教授
柳澤 光一
TDK(Thailand)CO.,LTD 元工場長

●監事
吉田 宗一郎
吉田公認会計士事務所 所長

（五十音順にて記述）

事務局活用リスト

事務局では様々な資料やサービスを用意して支援者の皆様のお問い合わせやご要望にお応えしています。お気軽にご連絡ください。

民際センターのボランティア活動がしたい

民際センターでは、ボランティア活動を行ってくれる方を募集しています。ボランティアの種類は、事務局ボランティア、入力ボランティア、翻訳ボランティア、広報資料作成ボランティアです。必ずしも事務所に来ていただく必要はありません。メールにて職員とのやり取りや自宅で行っていただくこともあります。ご興味がおありの方は、是非お電話またはメールにてお問い合わせください。

終活の相談をしたい

民際センターでは、終活のお手伝いに関するご相談を受け付けています。皆様のご遺産や相続による財産をお預かりし、未来を担う子どもたちへの教育普及支援事業に活かすためです。お気軽にお問い合わせください。専門委員とともにお待ちしています。ホームページからのお問合せも可能です。

奨学金の説明を聞きたい

お電話またはメールにてお問い合わせください。ご説明させていただきます。

毎年忘れずに送金したい

民際センターホームページよりクレジットカードによる寄付にて自動継続の引き落としをご選択ください。（ すでにご支援をされている方で、途中から自動引き落としにすることも可能です。お問い合わせください。）

お知らせ

～書き損じはがきで支援ができます！～

年賀はがきを購入したけれども使用しなかった、印刷を間違ってしまった等、未使用のはがきで子どもたちの支援ができます。詳しくは、お電話またはメールにてお問い合わせください。ご希望の方には、ご案内チラシや送付用の封筒もご用意が可能です。また、ホームページでもご案内しています。

編集後記

本号では、ダルニー・ドナー連絡会特集を実施し、ダルニー連絡会（日本の各地でダルニー奨学金を広めるために勉強会やイベント、募金箱設置等の活動をしていただいている会）の方々に多大なるご協力をいただきました。永くダルニー奨学金に携わっていらっしゃる方々ばかりで、色々教えていただきました。今後とも、民際センターをよろしくお願いいたします。（山）

ダルニー通信 85号　2019年12月1日 発行　発行人：秋尾晃正

公益財団法人 民際センター
公益財団法人 民際センター　〒103-0023 東京都中央区日本橋本町2-6-13 山三ビル7F
TEL：03-6457-5782　FAX：03-6457-5783
Eメール：info@minsai.org　ホームページ：www.minsai.org
www.facebook.com/minsai.org　twitter.com/minsaiorg　www.instagram.com/edf_japan/